

演出家ジョルジュ・デルノンが語る

びわ湖ホールへの想い (びわ湖ホール広報誌「湖響」2012年9月号より)

中 東生(音楽ライター/スイス在住)

びわ湖ホールメインロビーに入るとすぐにデルノン氏は、「ああ、やっぱりここはいい劇場だなあ。この贅沢な空間、素晴らしい眺め...」と、しばし再来訪の感慨をかみしめていた。そして袖から舞台上に上がる時は、感嘆の声すらあげていた。それから一言一言大切に、話を始めてくれた。

「びわ湖の景色が好きで、最高のリゾート地に来たような気分になります。そして何よりびわ湖ホールは大好きです。どこが好きかって、とにかく全てが素晴らしい。建築物としても興味深いし、内部のそれぞれの部分も居心地がいい。舞台の袖には広い空間があり、設備も整っている。掃除が行き渡っていて、整理整頓が完璧になされている、このような劇場がほかにあるでしょうか。その上、プロフェッショナルでいかなる要求にも全面的に協力してくれるスタッフがいます。このびわ湖ホールとの共同制作でなければ、私の3回目の演出となる『コジ・ファン・トゥッテ』に再挑戦しようという気持ちも起きなかったかもしれません。びわ湖ホールのために作品の神髄に迫った演出を生み出し、沼尻氏や日本人を中心としたキャストとともに創り上げるこの『コジ・ファン・トゥッテ』は私にとって新しい挑戦になるでしょう。

『コジ・ファン・トゥッテ』は他のダ・ポンテ三部作『フィガロの結婚』『ドン・ジョヴァンニ』と並んでモーツァルトのオペラの傑作ですが、他の2作品が、階級制度や当時の社会背景を抜きにして理解するのが難しい作品であるのに対して、『コジ・ファン・トゥッテ』は時代も国境も越えて存在する、人類普遍のテーマを題材にしていると言えるでしょう。そこに私は今回の共同制作の意義を感じるのです。ヨーロッパで生まれたオペラという芸術形態を日本に押し付けるのではなく、人類普遍のテーマを東洋的思想で受け止める日本の皆さんからも学びながら演出し、それをバーゼルで披露できることこそが真の共同制作ではないか、と私は確信しています。

私から見ると西洋では、キリスト教思想が根底にあるせいか、苦難を最重要視する傾向があると思います。愛情関係も社会も政治もすべて、苦しんで戦っていることに意義があり、そうして初めてユートピアに到達できると考えられていますが、個人的には、それは残念なことだと思っています。この作品に秘められた悲劇性も喜劇性も両方楽しんでもらいたいからです。西洋

と東洋の融合が見られるような哲学観を感じられる演出ができれば本望です。

『コジ・ファン・トゥッテ』を通して観客は、裏切り、愛情、貞節、憧れ、天国への憧憬、さらには時間という観念、共に生きるための新たな形式などについて熟考することができます。そして、それらの中で私が特に強調したいテーマが“結婚”です。一昔前までは、結婚は“しなければならないもの”でした。それ故に、結婚生活は逆に軽んじられてきたという矛盾が起こっていました。結婚しない選択肢も当たり前になった現在、結婚生活そのものをより重要視する傾向がでてきたと思います。結婚に対する恐れも義務もなく、それを選択することが可能になった今の世代と共に、もう一度 Hochzeit (結婚) と Hoch Zeit (最上の時) について表現したいと思います。

また、天国についても興味深い考察ができるでしょう。アルフォンソの提案による賭けをきっかけに、彼らは隠された欲求に支配される世界に移行していきます。それは、常識の世界を支配する時間が止まったことを意味しています。常識的な時間が止まると、突然、無意識の内面が表出してくるのです。そして天国への憧憬ともいえる、天国への道が始まります。しかし最後はたどり着けないのです。西洋人の私にとって天国とは自由と幸福の象徴ですが、東洋の涅槃との融合を実現できれば最高だと思います。

二組のカップルは今後どうなっていくのでしょうか。現実主義的でない一組は別れるかもしれないし、幻想を排除できたもう一組は新たな関係を築けるかもしれない。音楽的に見れば、フィオルディリージとフェランドが主役のカップルであると確信させる表現がなされています。

『ドン・ジョヴァンニ』におけるドンナ・アンナとドン・オッターヴィオ、『魔笛』におけるパミーナとタミーノに共通する、深味のある楽想でモーツァルトは彼らを描いているからです。しかし、『コジ・ファン・トゥッテ』の副題として『恋人達の学校』というタイトルも付けられています。私の演出では学校で教わるような、決めつけた規則はありません。共演者と共に作り上げたものを、観客の皆様が一人一人自由に解釈して、楽しんでいただきたいと思います。」

言葉少なげに話し始めたデルノン氏は、インタビューが進んでいくうちにどんどん雄弁になり、確信と共にこう結んだ。

「220年以上も前にモーツァルトが描きたかった普遍のドラマ『コジ・ファン・トゥッテ』が、現代のびわ湖ホールで再現されるのが今からとても楽しみです。」



ジョルジュ・デルノン

Georges Delnon 演出・舞台美術・照明

ベルン大学とフリブール大学にて文学と文化史を、ベルン音楽院で作曲と音楽理論を学ぶ。『カルメン』『こもり』、『ルクレツィアの凌辱』、『椿姫』『蝶々夫人』『三つのオレンジへの恋』、『ジュリー嬢』、『グリセルダ』(ヴィヴァルディ)、『若い卿』(ヘンツェ)、『マリア・スタアルダ』、『エツィオ』、『バルジファル』『イエ

スーフア』『メデア』、『黒蜘蛛』(スーテルマイスター)、『羊の笑い』(デミエール)、『1日だけの王様』(グリューナウアー)、『ホフマン物語』『ルル』などの演出を手がける。1996~99年 コブレントツ市立劇場総裁、99~2006年 マインツ歌劇場総裁、06/07年シーズンからバーゼル歌劇場総裁、09年 シュヴェツインゲン SWR 音楽祭の芸術監督をつとめる。また04年 ミュンヘン・ピエンナーレ、マインツおよびパリ国立オペラの秋音楽祭のために音楽劇『22.13』(M. アンドレ)、05年 シュヴェツインゲン音楽祭のために、音楽劇『魔法』(F. ツェラー)、07年バーゼル歌劇場とシュヴェツインゲン音楽祭共同制作『山の老人』(B. ラング)、ミュンヘン・ピエンナーレにて、08年『鋭い耳』(カローラ・バオクホルト)、10年『マルドロール』(フィリップ・マインツ) 等の世界初演を数多く手がける。12年9月ルツェルン音楽祭にて、アルフレード・ツインマーリン『光』世界初演を演出。後進の指導にも意欲的で、舞台造形学をエッセン・フォルクヴァング音楽大学とルツェルン音楽祭主催のマスタークラス、モンテプルチャーノの音楽と演出学のためのヨーロッパ・アカデミーで教える他、マインツ音楽大学で舞台作品学における教授も務める。04年からは、フランクフルト音楽大学で音楽劇演出学の教鞭もとっている。2015/16シーズンよりハンブルク国立歌劇場総裁(音楽監督ケント・ナガノ)に就任が決定している。



クラウディア・イツロ *Claudia Irro*

衣裳

ドイツのミュンヘンで服飾デザインを学ぶ。卒業後の数年間に、ドレスデン州立劇場でセバスチャン・バウムガルテン、ミュンヘン小劇場でクリストフ・マルターラー、バーゼル歌劇場でベネディクト・フォン・ペーターらのプロダクションでアシスタントシップを得る。フリーの衣裳デザイナーとして、ミュンヘン小劇場の「ジャンス・ダルク」(バトス劇場との共同制作、演出:フレデリック・ティデン)、バーゼル歌劇場の「大行進曲」(演出:アンティエ・シュツプ)、2012年2月にはマンハイム国民劇場の「ミヒヤエル・コールハース」(演出:サイモン・ソルバーク)

などの衣裳を担当した。2010年からは様々な舞台やエキシビジョンを手掛け、RATTEHAWAIIグループの一員として2012年3月のUND7/アート・カールスルーエに参加。2011年には、イタリアのヴェネツィア・ピエンナーレで、シュテファン・ケーギの「ビデオ・ウォーキング・ヴェニス」にフェローとして参加した。



平成24年度文化庁優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業

びわ湖ホール・バーゼル歌劇場共同制作
沼尻竜典オペラセレクション
モーツァルト作曲

歌劇

コジ・ファン・トゥツテ

全2幕 イタリア語上演・日本語字幕付

Così fan tutte



滋賀県立芸術劇場

びわ湖ホール